

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(高学年型)

学校名
尾道市立栗原小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	2	2	2	3	3	2	14	7	21

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第5、6学年の指定教科

指導教科名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	5	3	3	9	
理科	6	2	3	6	
体育科	6	2	2.6	5.2	

授業時数 計 20.2 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
				0	

授業時数 計 0 (b)

授業時数 合計 20.2 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	2	1
6年 1組 (担任: A)	A	A	A	A	推進	専科	A	専科	推進	B	A	A	A
6年 2組 (担任: B)	B	B	B	B	推進	専科	A	専科	推進	B	B	B	B
5年 1組 (担任: C)	C	C	C	C	推進	専科	専科	専科	C	C	C	C	C
5年 2組 (担任: D)	D	D	D	D	推進	専科	D	専科	D	D	D	D	D
5年 3組 (担任: E)	E	E	E	E	推進	専科	E	専科	E	E	E	E	E
週当たり標準授業時数	5		2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	2	1

4 高学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数	授業時数の合計
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
6-1	36	A	6-2	図工	1.4	1.4	18.4	19.8
6-2	34	B	6-1	外国語	2	2	19	21
5-1	26	C				0	21.5	21.5
5-2	25	D				0	22.9	22.9
5-3	25	E				0	22.9	22.9

5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉	〈成果〉
<p>① 教科専門性の高い教員による、教材研究を深めた授業実践(自作教材の活用やICTの有効利用)。</p> <p>複数クラスでの同一授業実施による、教材の改善・ブラッシュアップの高速化。</p>	<p>教科担任が複数のクラスを横断的に見ることで、学年全体の学力の傾向を把握し、担任と連携をすることができた。また、学級に合わせた授業づくりや、理科の実験の仕方など授業の即時改善は効果があった。</p> <p>教師の専門的な知識や技能(理科の実験準備や音楽の技能指導等)が還元され、児童の学習への興味・関心が向上した。</p> <p>① ICT機器やデジタル教科書を効果的に活用した視覚的な授業展開が定着した。</p> <p>指標として、理科・外国語科 単元末テスト 85点以上を80%とした。 理科70% 外国語科71%であった。</p> <p>児童アンケートから ・専門性の高い先生によって授業がわかりやすくなった(「その教科のみを鍛えた先生だからわかりやすい」)。 ・いろいろな先生と交流でき、多様な視点で学べる。という意見も見られた。</p>
<p>② 複数の教員が学級に関わることで、児童の行動や情緒を異なる視点から観察・共有できるように、学年内での気になる児童に関する情報交換を行った。</p>	<p>担任一人では気付きにくい児童の小さな変化や、教科特有の輝き(「国語は苦手だが理科では興味・関心が高い」等)、特定の児童に対する先入観を排除し、「学級では見せない良さ」等を多角的に評価できた。</p> <p>② 「教科担任制になってよかったと思います」の児童アンケートでは肯定的評価が1回目89.1%、2回目92.0%と増加した。 また、「勉強の内容がよく分かるようになりました」の児童アンケートでは肯定的評価が1回目86.1%、2回目87.7%と増加した。</p> <p>指導者アンケートより指導者の90%が「組織的な生徒指導ができており、児童側も「いろいろな先生と話す機会が増えた」との回答が5年生で87.8%、6年生で90.6%と高い水準となった。</p>
<p>③ 中学校と同様の「教科ごとに先生が変わる」システムへの早期適応。</p> <p>専科教員による、中学校の学習内容を見据えた専門的な語彙や思考法の導入。</p>	<p>③ 児童が「先生が変わる」ことに抵抗がなくなり、自分の学習ペースを自律的に管理する姿勢が見られた。</p> <p>授業の開始・終了の切り替えがスムーズになり、中学校生活への心理的なハードルが低減された。</p>
<p>④ 空き時間の確保による、放課後に行っていた事務作業の校内時間内への移行。</p> <p>教材・テスト採点の効率化(同一教科を複数クラス分まとめて行うことによるスピードアップ)。</p>	<p>④ 空き時間の確保により、放課後に行っていた事務作業が勤務時間内に処理できるようになり、超過勤務時間が前年度比で減少した。</p> <p>教材研究の時間が確保され、精神的なゆとりをもって授業に臨めるようになった。</p>
<p>⑤ チームとしての学年経営の促進 複数の教員が協働して学年を指導する体制が強化され、学年全体としての指導の一貫性が高まる。</p>	<p>学級担任の心理的孤立が防がれ、学年チームとしての「同僚性」が高まった。</p> <p>⑤ 児童が「担任以外の先生にも相談できる」という安心感をもつようになった。</p> <p>学級担任が抱え込みがちな問題を学年全体で共有する文化が醸成され、教職員のメンタルヘルス維持にも寄与した。</p> <p>校内全体の「授業改善」に対する意識が向上した。</p>

〈課題〉	
①	<p>「学級担任による指導」との連続性の不足。</p> <p>特定教科に特化することで、他教科との横断的な学習(総合的な学習の時間等)との関連付けが薄れる懸念がある。</p> <p>単元末テストの結果において、目標値を10%下回った。児童の感じている理解と、実際の学力との差がある。</p>
②	<p>教員間での児童理解にズレが生じた際、指導の統一感が損なわれるリスクがある。</p>
④	<p>教員間の情報共有のための打ち合わせ時間が増加した。</p> <p>教科間の準備負担の偏りがある(実験準備が必要な理科や、作品管理がある図工など)。</p> <p>指導者アンケートでの教師の負担軽減に関する項目においては、1回目83%、2回目は70%と減少した。</p>
⑤	<p>教科担任制や授業の分かりやすさを肯定的に捉える児童は増加したが、教科担任制の授業が楽しみという項目の肯定的な評価が減少していた。</p> <p>また、児童アンケートの記述から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任以外の先生には相談しにくく、関係が築きにくい。 ・先生によってわかりやすさに差がある。 ・好きな先生・苦手な先生が増えることがある <p>などの意見がみられた。</p>



〈対策〉	
①	<p>授業の様子を共有し、学級担任が児童の小さな変化や躰きを即座に把握できる体制を強化した。</p> <p>各教科の進捗を共有し、教科横断的な視点を持った単元構成を意識的に行うように進めた。</p> <p>学級によって学力に差がみられる。そのため、専科、教科担任で授業の進め方を学級に合うように改善をしている。</p>
②	<p>児童への声掛けや、生徒指導上の共通理解を図り、一人一人の特性に合わせた指導が行えるようにした。</p>
④	<p>空きコマの割り振りにおいて、授業準備の負荷を考慮した業務分担を検討した。</p> <p>全体で集まるのではなく、専科、担任同士で短時間で情報共有を行った。</p>
⑤	<p>担任と違って、児童と一緒に過ごす時間が限定的になるため、特に専科の場合は、担任と連携して生徒指導的な立場から児童に寄り添った指導を行っていく。</p>